最終更新日：2021年12月28日

英語教育講座　門田 守 教授

バイロンと公共圏の研究

キーワード　バイロン/　バイロニズム/　公共圏/　コミュニケーション/

どのような研究をなぜ行っているか

英国における公共圏は1680年から1730年に最盛期を迎えたコーヒーハウスにおいて始まった。これはドイツの哲学者・社会学者であるユルゲン・ハーバーマスの説である。公共圏は最初に文芸的な場で興り、政治的空間に浸透していく。バイロンとの関係で面白いのは、マスメディアの発展と相俟って、公共圏が私的経験を商業利用する空間と化してしまうことだ。バイロンは『懶惰の日々』を非難され、『英国の詩人とスコットランドの批評家』を持って、気に入らぬ文人たちを切りまくった。いわば、18世紀的な議論する資質が詩人バイロンの出発点だった。ところが、大陸旅行を挟んで、彼の詩は私的経験（近親相姦、同性愛等）を語る、親密な自己吐露へと変貌する。公共の場での議論は、居間での私的な語りとなる。大作『ドン・ジュアン』も、結局読者への親密な語りの詩なのだ。バイロンの矛盾する資質―諷刺とロマン性―は、彼を「コミュニケーション行為」の詩人と規定すれば、一貫性をもって説明できる。さらに、バイロニズムの流行も読者のバイロンへの「コミュニケーション行為」の所産であるとすれば、無理なく説明できる。本研究により、バイロン詩の流行と背景文化を繋ぐことができる。

研究成果をどのように活用し，どのような貢献ができるか

バイロンほど変幻自在は詩人はいない。たとえば、急進的政治詩人、叙情的ロマン派詩人、戦闘的風刺詩人、自己劇化の詩人、陽気なユーモア詩人等々、さまざまな仕方で彼を捉えうる。彼をセレブリティ詩人とする見解は、既に定着している。その一方でイタリアからギリシアへと向かう時期は、ただのセレブリティとして彼を捉えるのには無理である。事実、ギリシア遠征の頃の彼は、近代的政治家へと変貌しようとしていたという有力な見解もある。公共圏が議論の場から商業利用の空間へと変貌するという枠組みを活用することで、バイロンへの解釈や評価に統一性をもたらし、彼の最大の理解者たちが一般大衆であったという事実の説明に貢献することができる。

これまでの連携研究や社会貢献活動の実績

国際バイロン学会の国別組織である日本バイロン協会（事務局長、理事）、イギリス・ロマン派学会（編集代表、総務、理事）において、バイロン及びイギリス・ロマン派の研究に貢献してきた。第41回イギリス・ロマン派学会（奈良教育大学、2015）の開催校委員を務めた。第35回イギリス・ロマン派学会(明星大学、2009)において、シンポージアム「ロマン派と演劇」の司会・発題者を務めた。国際バイロン学会発行の論集*Byron and the Isles of Imagination: A Romantic Chart* (2009)や、イギリス・ロマン派学会の機関誌『イギリス・ロマン派研究』(2007, 2003)等において、バイロンやイギリス・ロマン派の周辺に関する論文を掲載してきた。

奈良教育大学　教育研究支援課 学術研究推進係 0742-27-9135　g-kenkyu@nara-edu.ac.jp